

久保訓子さん 小説「かたわれ」 第三十五回大阪女性文芸賞を受賞



久保訓子さん

徳島文学協会の理事を務める久保訓子さんが、小説「かたわれ」で第三十五回大阪女性文芸賞を受賞した。作品は主人公の女性が、沼地で女の生々しい足を拾い、それと同居するという幻想的な内容。足との共同生活や、足を連れての旅行など、卓越した想像力を駆使して異様な作品世界に不思議なリアリティを持たせている。

一文が千字を越える部分もあるなど文体にもこだわりが見られ、最終選考委員の中沢けいさん、町田康さんともに一致した高い評価での受賞になった。

全国から三百三十九編の応募があった。また徳島在住の書き手としては初の受賞となった。受賞賞金は三十万円。受賞作は二月発売の文芸誌『鐘』三十号（大阪女性文芸協会）に掲載される。

受賞エッセイ

久保訓子

佐々木先生の講座を初めて受講したのは何年前だったのか忘れてしまいました。創作にあたっての真摯な心構えを聴いて衝撃を受けたことを忘れることができません。

ある日、やっと一作を書いて先生に見せると、「こんな悪文読んだことがない。ほら主語と述語が振じれているでしょう、これも、これも。それに人物を図式化してはいけない。この背景は香川県のイルカランドでしょう、パンフレットの中に既成の人物を歩かせているだけだ」と。そして次作を持っていくと、「リアリティも書いている人の熱情も感じられない。この手のものに一人称の語りとは」とまた。その間に藤代さんが受賞し、若い高田さんが受賞し、私に存在価値などないような気がしていました。そうして、三作目に提出したものについては、ひよっとしたら可能性があるのではないかと、とあってくれました。この度受賞することになった作品の元です。

しかし、これもうまく纏まらず、何度捨ててしまおうと思っただけか、しないのですが、その都度先生から、「久保さん、もうこの先はないと思いなさい」といわれ、先はないという言葉の恐ろしさにだけ一年半の間推敲に推敲を重ね続けました。最後に先生は、「これはきつといける」と初めて褒めてくれたところ、念願の大阪女性文芸賞を受賞していました。

小説を書くことは作品を認めてくれる人を探すことでもあるといいますが、書いたものを責任をもって否定してくれる人を探すことでもあるように思います。習作が褒められる域にあるなどまずあり得ないからです。信頼関係が伴います。私は佐々木先生に褒められると、髪を短く切り過ぎた時のように首のあたりがすうすうして自分ではない様です。でもつい先日提出した作品について、「哲学がない、浅い、意味がわからない、最後にオチを付けない」など、また先生の言葉が飛んできたので、やっと心が落ち着きを取り戻して、寒風の扉を開けるような境地に戻ったものです。

阿波しらすぎ文学賞

徳島といえば阿波踊り、人形浄瑠璃など古来より文化芸能が盛んな場所として知られ、最近ではアニメを通してユニークな町おこしが話題になっています。

現代文学においても瀬戸内寂聴、北條民雄という偉大な小説家を輩出しており、改めて徳島には様々な文化が生まれる素地があることがわかります。しかし一方で、全国の大都市同様、文化の都市部集中化や少子化のあたりを大きく受けており、活力に満ちているとは言い難いのも事実です。

そのような中、文化的な面から地域創生の一つのきっかけを作ることができればという願いを込めて、徳島文学協会と徳島新聞社が力を合わせて「阿波しらすぎ文学賞」を設立しました。

「阿波しらすぎ文学賞」に応募いただいた皆様の作品を通して、徳島という場所の持つ多様な面があぶりだされることで、徳島を再認識、再発見していただく機会になればと思います。

また執筆活動を通して、多くの方に生きがいや心の豊かさを実感してもらい、真の地域活性化が促されれば、それに勝る喜びはありません。

多くの皆さんから参加いただくため、全国公募としました。ただし徳島の地域や文化、歴史、産業などを作中に登場させてください。

単に徳島を賛美するのではなく、徳島のどんな側面をどのように切り取り一編の文学作品として成立させるのか、皆さんの大胆なアプローチを期待しています。

徳島新聞 阿波しらすぎ文学賞

作品募集

◆募集資格

広く全国から募集

※年齢、性別、職業、国籍は問いません。

◆募集作品

日本語で書かれた広義の小説作品

※未発表のものに限ります。

※ただし徳島ゆかりの地域や文化、歴史、産業などを作中に登場させてください。

◆枚数

原稿用紙十五枚以内

◆締め切り

二〇一八年六月十日消印有効

※締め切り後の作品の変更や、応募原稿の返却はできません。

◆書式

縦書きを原則とします。

※パソコン・ワープロ原稿の場合は四百字詰原稿用紙での換算枚数を明記してください。表紙にタイトル・住所（徳島出身で県外在住の方はその旨お書きください）・氏名（ペンネームの場合は本名も）・年齢・職業・電話番号（あれば携帯電話も）を書き、作品にはページ番号をつけて右肩をホッチキスでしっかりと綴じてください。応募は一人につき一編とします。

◆最終選考委員長

吉村萬孝氏

※選考経過に関するご質問にはお答えできません。

◆賞金

阿波しらすぎ文学賞 三十万円

徳島新聞賞 十万円

徳島文学協会賞 三万円

※徳島新聞賞は徳島出身及び徳島在住者から、徳島文学協会賞は二十五歳以下の応募者から選ばれます。

◆発表

二〇一八年八月下旬

徳島新聞紙上にて発表

※著作権は徳島新聞社に帰属します。

◆応募作の宛先

徳島新聞社 事業局 事業部

〒七七〇-八五七二

徳島県徳島市中徳島町

二丁目五番地二

◆問い合わせ先

徳島文学協会事務局

〒七七二-三三〇一

徳島県名西郡神山町

阿野字方子一〇三

メールアドレス
society@t-bungaku.com

自分の大切な場所

『郷里』 佐々木義登著 二〇一八年二月十九日 亜紀書房刊

計盛達也

「それにしても『青空クライシス』なんて誰が考えて、誰が書いたんだろう。どんな心境で思いついて文字にしたのだろうか。なんのつもりだか青空クライシスだなんて、ひどく神経を逆なでされる気分。何の覚悟もない」

いや、僕の言葉じゃないッス。佐々木センセイの「青空クライシス」からの引用デス。2007年に三田文学新人賞を受賞したこのデビュー作から最新作「鈴の音」まで6編が収録された佐々木義登の初作品集『郷里』が発売された。先の引用が原因ではない（と思う）が、デビュー作は作品集のタイトルにならなかった。しかも「郷里」という小説は収録されていないのだ。「タイトル詐欺かよ」と思いながら読んでいくと、作品全てに通底している何かを感じる。たぶんこれが「郷里」なのだろう。

巻頭に収録されているのは「鈴の音」。妻の墓参りの帰り、鬱蒼とした山道で鈴の音を聞き、遍路姿の老婆を見つめる。心配になっ

て話しかけると、口元がうごめいているが、声らしきものは聞こえない。怪訝に思っていると、後ろにいた娘が祈りとも呪詛とも聞こえる読経のようなうめき声を発していた。妻の死という悲しみに暮れる男がこの世ならざるものと邂逅する。2作目の「桃」は、父の葬儀以来関わりを断っていた故郷にUターンした青年と「どんならん」叔母との奇妙な関係を描く。その他の作品も徳島や四国が舞台になったり、登場人物の故郷として設定されている。なるほど佐々木の故郷・徳島を描いているが、この作品集の「郷里」とはそんな表面的なものではない。もっと個人の内面の深く、深く沈んでいったところなのだ。

作品の主人公たちは、リストラされたり、就職浪人だったり、上司や親戚から疎まれたり、日々を気楽に生きることができない人たちばかりだ。彼らは沈んでいく。沈んだ先でふと気づく、いや体験する。他者と繋がっているという

ことに。ここでの他者とは生きている他人だけではない、愛する娘と亡き妻、憎んでいた父、遙か昔のエジプト王、はたまた祖父が感じた死にゆく馬の魂や、左腕にしがみついたトカゲ、この世あの世問わずありとあらゆるものとの繋がりを自らの内に感じる。そこはユングのいう集合的無意識なのかもしれない。ただ佐々木の場合、そこにどこか土の匂いを漂わせ、読者は懐かしさを感じる。この場所を言葉にすると「郷里」となるのだろう。

「世界は私たちの心持ち次第でキレイにも狂気にもなる」と、「空に住む木馬」の主人公は思う。万物と繋がっているということは、世界と繋がっているということにほかならない。だから自分と世界との接し方が変われば、世界が変わるのである。僕らは日々の雑事に忙殺されて、世界との関わりが煩雑になっていることがあるのではないか。一度立ち止まって、自分の大切な場所を感じてみてはいかがだろうか。この作品集はかけがえのない「郷里」へと連れて行ってくれる。

徳島文学協会

会長

佐々木義登

「郷里」



「魂を抉る言語以前の野生の叫びが、透徹した小説世界のど真ん中を貫いている。」
推薦 吉村萬志氏

妻の墓参りの帰り、娘の手を引きながら森の山道を歩いていると、白装束の人影を見かける。

行き倒れかと案じてと近寄ると、娘の口から、老婆の祈りのような言葉ならぬ言葉が語り出される……

個を超えてつながる命や情念の奔流を描いた最新作「鈴の音」をはじめ、「桃」「ナイフ」「空に住む木馬」「王と詩」、三田文学新人賞受賞作「青空クライシス」。

「郷里」をまつすぐ、時に影のように描いて忘れがたい余韻を残す全六篇。

佐々木義登（ささき・よしと）

一九六六年徳島県生まれ。二松学舎大学卒業。二松学舎大学博士後期課程修了。博士（文学）。二〇〇七年「青空クライシス」で第十四回三田文学新人賞受賞。現在、四国大学教授。

『徳島文学』2018年4月創刊！ ※会員には一冊進呈します。

講座案内

「おとなのための文学講座」

皆さんがよくご存知の著名な作家たちの素顔にせまります。第二回目は、「芥川龍之介と太宰治」。

偉大な作家たちの中で、実は文学のバトンが受け継がれていた。学校では教えてくれなかった、芥川と太宰の意外なつながりを紐解きます。

■開催日 四月二十一日(土) 十九時～二十時半

場所 徳島県立文学書道館

講師 佐々木義登

参加費 会員一五〇〇円、非会員二五〇〇円

定員 十五人

「わたしのイチオシ小説」

お気に入りの小説を持ち寄り、皆さんで紹介し合います。一人一作品、持ち時間五分で読みどころやおすすめのポイントを説明します。皆さんの紹介を聞いて、ジャッジ役専門でという方もぜひご参加ください。

プレゼンが終了した時点で、参加者全員で投票します。プレゼンした方は自分が紹介した作品以外で一番興味を持った作品に投票してください。観客として参加された方は自由に投票してください。

投票でその日の「イチオシ小説」を決定します。「イチオシ小説」に選ばれた方は、徳島文学協会H・Pに本の紹介文(原稿用紙二枚程度)を作成してください。協会より原稿執筆料として五千円分の図書カードを進呈します。小説の楽しさを皆さんで味わっていたたく講座です。気軽にご参加ください。

※プレゼンされる方は、事前に紹介本を事務局までご連絡ください。

■開催日 五月十九日(土) 十九時～二十時半

場所 徳島県立文学書道館

参加費 プレゼン参加者一〇〇〇円

観客・ジャッジのみ 五〇〇円

定員 十五人

「現代小説を読む」

現代小説というと、難しいという印象がありませんか。現代思想や現代芸術のポイントを押さえて読めば、驚くほど全体像が見えてきます。小説の書き方とともに読み方を皆さんと一緒に考えていきます。

■開催日 六月十六日(土) 十九時～二十時半

場所 徳島県立文学書道館

講師 佐々木義登

参加費 会員一五〇〇円、非会員二五〇〇円

定員 十五人

「エッセイ入門講座」

どなたでも文章スキルを身につけていただくことで素敵な文章が書けるようになります。多くの人に読んでもらってよかったと言ってもらえるような文章の書き方を伝授します。

■開催日 七月二十一日(土) 十九時～二十時半

場所 徳島県立文学書道館

講師 佐々木義登

参加費 会員一五〇〇円、非会員二五〇〇円

定員 十五人

『徳島文学』創刊記念祝賀会

『徳島文学』創刊記念祝賀会を開催いたします。ご参加いただける場合は五月十日までに徳島文学協会事務局までメール、電話にてご連絡ください。

日時 平成三十年五月二十七日(日)

十二時～十五時

会場 ホテルクレメント徳島

3階 金扇の間

「ご入会のお申し込み方法

- 一 事務局に資料をご請求ください。入会案内一式をお送りいたします。
- 二 会の運営のご賛同いただけましたら、同封の郵便振替用紙をご利用の上、年会費(個人七千円、法人一万三千円)をご納入ください。
- 三 振替用紙の、ご依頼人の欄にご住所およびお名前を明記ください。
- 四 郵便局の受領証をもって徳島文学協会の領収書に代えさせていただきますのでご了承ください。当会の領収証がご入用の場合はお申し出ください。

「と」と：古代エジプト文明の知恵の神

「ト」：「ト」由来です。

ご入会や講座のお申し込み・お問い合わせは徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103 TEL:080-6284-0298

society@t-bungaku.com http://www.t-bungaku.com/